

学長選考会議御中

平成 28 年 6 月 14 日

国立大学法人奈良女子大学学長 自己評価書

学長 今岡春樹

ここに平成 27 年度及び平成 28 年度第 1 四半期の自己評価を行う。平成 27 年度は第 2 期中期目標期間の最終年度であり、また第 3 期中期目標期間の目標・計画の策定を行う年度でもあった。以下、5 つの項目ごとに主な取り組みを列挙する。

○教育

- ・理系女性教育研究共同機構の設置（平成 27 年 4 月）
- ・大学院生活工学共同専攻の設置（平成 28 年 4 月より入学者受け入れ）
- ・教養教育改革として少人数ゼミ「パサージュ」開講（平成 27 年 4 月）
- ・全学部で新入生保護者説明会の実施（平成 27 年 4 月）

○研究

- ・共生科学研究センターは外部評価で高い評価を獲得（平成 28 年 1 月）
- ・科学研究費細目別採択件数が 8 細目で上位 10 位以内に位置（平成 23～27 年度）
- ・附属幼稚園と附属小学校は研究開発学校の指定（平成 27～30 年度）

○社会連携

- ・地域と包括的連携協定（下市町、十津川村、野迫川村）（平成 27 年 2 月、3 月、4 月）
- ・地（知）の拠点大学による地方創生事業（COC+）に採択（平成 27 年 9 月）
- ・留学生受け入れ 250 人計画の策定（平成 27 年 6 月）
- ・国際交流を推進するためサマープログラムを実施（平成 27 年 7 月）

○業務運営

- ・理事でない副学長（地域創生担当とハラスメント防止・障害学生支援担当）制度の新設（平成 28 年 4 月）
- ・男女共同参画推進機構の組織見直し（平成 28 年 4 月）
- ・奈良女子大学障害学生支援室設置（平成 28 年 4 月）
- ・入試制度を改革するためアドミッションセンターを設置（平成 28 年 4 月）
- ・重点支援の枠組み②（全国的な教育研究）を選択し戦略を策定（平成 27 年 8 月）
- ・女性教員の採用比率 50%の通達（平成 27 年 4 月）
- ・計画的な退職教員の不補充（平成 27 年 4 月）
- ・職員の独自採用（平成 27 年 12 月）

- ・定年延長と年俸制の本格導入（平成 27 年 4 月）
- ・財政健全化のため教員研究費を半額に減額（平成 27 年 4 月）
- ・なでしこ基金による寄附金受入れ増加（平成 27 年度）
- ・大学院改組の準備（平成 30 年度開始に向けて）

○施設改修工事

- ・学術情報センター改修工事（平成 27 年 9 月～平成 28 年 3 月）
- ・記念館耐震改修工事（平成 26 年 12 月～平成 27 年 12 月）
- ・RI 総合実験室改修工事（平成 27 年 2 月～7 月）
- ・附属中等教育学校耐震改修工事（平成 27 年 12 月～平成 28 年 2 月）

国立大学法人を取り巻く経営環境は毎年悪化している。その要因は運営費交付金の毎年 1%削減である。さらに運営費交付金はもらいきりで人事院勧告による公務員給与と配分額が連動しないため、インフレーション環境では経営を圧迫する強い要因となる。退職教員の不補充により人件費を抑制する方法しかないが、平成 26 年度に大規模な学部改組を行っているため、完成年度である平成 29 年度までは限定された手法となる。さらに、施設の老朽化は深刻で、目的積立金や補正予算等で多くの改修工事を行っているが、大学の持ち出し分も多額である。

一方で社会の変化は急激で、近年産業界から大学に求める要求は具体的になってきている。「次代を担う人材育成に向けて求められる教育改革（日本経団連 平成 26 年 4 月）」、「これからの企業・社会が求める人材像と大学への期待（経済同友会 平成 27 年 4 月）」などがその例で、その影響力はガバナンス改革や入試改革に及び、極めて大きい。また大学の経営に直結する幾つかの法律が矢継ぎ早に施行日を迎えている。改正地方教育行政法（平成 27 年 4 月施行）、障害者差別解消法（平成 28 年 4 月施行）、女性活躍推進法（平成 28 年 4 月施行）、改正地域再生法（平成 28 年 4 月施行）などであるが、それぞれアドミッションセンター設置、障害学生支援室設置、男女共同参画推進機構の組織見直しと女性教職員比率の目標設定、COC+採択と関連している。

このような状況下で、学長として誠意管理運営を行ってきた。平成 25 年度の就任当時から「学生を真ん中に置く」ことを心がけて来た。学生のために、奈良女子大学という環境を、ハードとソフトの両面から少ない予算の中で評価に値する整備をして来た。列举した環境整備はどちらかと言えば守備的になるので、今後は攻撃的な側面つまり「大学の夢」として「学生を活性化させるための夢」を創造して行きたい。